

## 2022年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学 拠点研究会・活動報告

### 海域アジア・オセアニアプロジェクト東京都立大学キックオフミーティング

日時：2022年10月28日（金）17：00-19：00

#### プログラム：

17:00-17:05 開幕の辞 綾部真雄（東京都立大学）

17:05-17:30 趣旨説明 河合洋尚（東京都立大学）

「トランスネシア研究プロジェクトの概要と研究意義について」

17:30-18:00 発表① 横田浩一（人間文化研究機構／東京都立大学）

「潮州からみる海域アジア：想像／創造されるカテゴリーとはみだす領域」

18:00-18:30 発表② 河野正治（東京都立大学）

「フロンティアとしての島嶼世界：ミクロネシアにみる異質な人々の馴化・交錯・並存」

18:30-19:00 討論

19:00 閉幕の辞 山口 徹（慶應義塾大学）

#### 要旨：

2022年9月から人間文化研究機構「海域アジア・オセアニア」プロジェクトの拠点の1つが、東京都立大学人文科学研究科に設置された。プロジェクトの開始を記念して、2022年10月28日に下記の内容でキックオフミーティングを実施した。

「趣旨説明」（河合洋尚）では、東京都立大学拠点研究を「トランスネシア・プロジェクト（略称：トラネシ）」と命名すること、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの意義として海域エリアにおけるボーダーレスな人・モノ・情報などの移動を検討していくことが述べられた。具体的な事例としては、客家やオセアニアのアジア系などを取り上げ、従来の空間区分では必ずしも十分に考察の対象となつてこなかった地域間のネットワークや人々の移動や文化的な融合などを視野に入れる重要性を示した。

次に、「潮州からみる海域アジア——想像／創造されるカテゴリーとはみだす領域」（横田浩一）では、地域を越えた人の移動およびカテゴリーの想像／創造という観点から潮州を対象に台湾への移住者のエスニシティや潮州料理の形成過程などの事例を紹介した。そして、地域を越えた人の移動や文化は特定の地域や人々に注目しているだけでは見えてこないと

め、地域や集団で分断せずに人やモノ・情報の移動とネットワークの形成がもたらすエスニシティや文化の変容を詳細に分析する必要があることを示した。

最後に、「フロンティアとしての島嶼世界——ミクロネシアにみる異質な人々の馴化・交錯・並存」(河野正治)では、西洋文化との接触や英語圏との関係に比して、アジアとの関係が軽視されてきたことを批判する近年の歴史研究の動向に触れながら、アジアのオセアニア系とオセアニアのアジア系の現状を捉える枠組みについて検討した。さらに、近年注目されているオセアニアへの中国の進出とアメリカの覇権争いという国際政治のマクロな構図では捉えられないミクロな生活実践、すなわち多様なアジア系の人々がオセアニア住民とそれぞれの距離感をもって暮らす現場の雑多性に注目する必要があることを論じた。

発表①、②の後には総合討論が行われ、「海」というキーワードから今後どのように本研究プロジェクトを発展させるのかなど、活発な議論が展開された。

#### **講演会：「環境アセスメントの人類学と学際的研究——わが風水研究の足跡を辿りつつ」**

渡邊欣雄（東京都立大学名誉教授）

日時：2023年3月5日（日）16:00-18:00

#### **要旨：**

本講演で渡邊欣雄氏は、学際的で国際的な標記の研究に至った経緯を説明しつつ、類種の考え方＝思想や世界観が時間・空間を超えて広く普及してきたことを紹介した。

その初期に、氏は地理学と文化人類学を架橋する研究としての「現地人の地理学」の研究を志していたという。氏の院生時代(1969～75年)には、地理学は現地人の知識を対象とせず、また文化人類学は現地の環境観・自然観を、あまり相手にしていなかったからである。

氏の調査は初期には沖縄であり、「沖縄の世界観」について学術誌に発表していた。いわゆる天上他界観や海上他界観に関する先行研究の整理と、調査に基づく研究だった。その反響は大きく、あるコメントを受けて類種の思想や世界観が東南アジアにもあるとわかり、また戦前の朝鮮にも類種の先行研究があることを知る幸運に恵まれたという。その後行った氏の台湾調査でも、体系的な環境に対する思想が存在することが判明した。それが現地人の説く環境アセスメント(環境影響評価)としての風水思想だった。現地人のこうした自然や環境に対する思想を知るや、氏は即座に学際的な風水研究を組織し(1989～93年)、人類学を

超えた研究領域までに拡大していったとする。

こうした学術環境下で、風水思想発祥の思想史を、中国大陸での調査や文献研究により徐々に復元し、中国国内はもとより東南アジア、韓国・朝鮮、沖縄、日本などに風水思想が伝播していったことを、各地域の地理的・歴史的事例を挙げながら解説した。

風水は体系的な現地人の環境に対する影響評価の思想であり、それは中華文明の及んだ東アジア・東南アジア地域に共通した考え方だという。すなわち現地の地形・地質・水系・気候・動植物などが、人の造る都市・村落、家屋、墳墓などに影響を与えるという独特な影響判断で、グローバルな思想としての性質を持つが、同時に各地域には独自の環境影響評価法も存在しており、ローカルな知識をも併せ持っていることは注意すべきだとする。

最後の質疑応答では、氏が考えた風水研究の学術用語や概念が、「風水」とは呼ばない現地にどれほど適用可能なのかなどの、活発な議論が行われた。

(文責：横田 浩一)